２０２４年4月１４日　礼拝説教要旨
ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ「奪うのではなく与える」
イザヤ５８：６～１０、エフェソ４：２５～２８

問１１０第八戒で神は何を禁じておられますか。
答　　神は権威者が罰するような盗みや略奪を禁じておられるのみならず、暴力によって、または不正な重り、物差し、升、商品、貨幣、利息のような合法的な見せかけによって、あるいは神に禁じられている何らかの手段によって、わたしたちが自分の隣人の財産を自らのものにしようとするあらゆる邪悪な行為また企てをも、盗みと呼ばれるのです。さらに、あらゆる貪欲や神の賜物の不必要な浪費も禁じておられます。

第八戒は、人を盗むこと、つまり誘拐の禁止であることは聖書学的には常識です。人は、人としての尊厳、自由を与えられています。それは誰からも侵害されてはいけない当然の権利なのです。しかし世の中には「ハラスメント」と言われる行為が溢れています。脅かされてはいけない領域へ勝手に踏み込み、まるで自分のもののように振る舞う。そのようにして人の尊厳を奪い、自由を奪うのです。それは他者の存在が視野に入っていないということではないでしょうか。

この他者の喪失こそ、人間の罪の状態を最もよく表しています。罪は、神さまという大いなる他者を見失うことです。人は、神さまとの約束を破り、御前から姿を隠しました。大いなる他者を見失った人間は、人の痛み、悲しみが想像できなくなります。同時に自分自身も見失います。エデンの園で神さまと共に生きていた幸せを忘れています。もっと別のところに自分の幸せがあるのではないか。そうやって自分一人で登りつめていく。その結果、人は他者を失い孤独になっていきました。アダムとエバの話では、その後、責任転嫁の話があります。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました」（３：１２）木の実を食べた責任を神さまのせい、エバのせいにする。ここに完全なる他者の喪失があります。

今、世の中で起こる様々な人権侵害、搾取、抑圧、そのすべての根はここにあります。自分の欲望、自分の成功しかありません。他者が不在なのです。戦争もそうでしょう。これこそ盗みでなく何でしょうか。自分の国の繁栄のために、相手の国に侵略して、命を奪い、生活を奪う。人として生きる権利、自由をことごとく奪っていく。また信仰問答では「浪費」も問題になっていますが、戦争こそ甚だしい浪費です。地球の資源を浪費し、大量の爆弾を作り、一体、戦争のためにどれだけのお金を使うのでしょう。戦争で失われたお金があったら、どれだけの貧困が世界からなくなるでしょう。

新約聖書にあるザアカイの話を思い出します。彼は徴税人でした。「徴税人の頭で金持ちだった」（ルカ１９：２）とあります。人はザアカイを「罪深い男」（１９：７）と言い、彼自身も「だれかから何かだまし取っていたら」（１９：８）と言いますから、それこそ合法的に見せかけて、法外の税金を徴収していたのでしょう。そうやって登りつめた人です。木に登るという行為は、自分一人で生きてきた彼の孤独を表しています。ところが、そのザアカイにイエスさまが声をおかけになります。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」（１９：５）彼は、神さまから見出されました。失われていたものが見出され、回復される。他者の回復があります。罪ゆえに神さまの御前からいなくなってしまったわたしたちをイエス

さまは見つけ出し、再び神さまと共に生きるようにしてくださった。「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」（１９：１０）そこにイエスさまの十字架とよみがえりの救いがあります。

そしてそのように神さまの御前に回復された者は、共に生きる他者を見いだすことができるようになります。問１１１を読みましょう。

問１１１それでは、この戒めで、神は何を命じておられるのですか。

答　　わたしが、自分になしうる限り、わたしの隣人の利益を促進し、わたしが人にしてもらいたいと思うことをその人に対しても行い、わたしが誠実に働いて、困窮の中にいる貧しい人々を助けることです。

これまで罪の中にあったわたしたちは他者不在でした。自分の利益だけ追求し、誰かから奪い取って生きて来た。しかし、神さまという大いなる他者を回復したわたしたちは、共に生きる隣人という他者の存在に目が開かれていきます。そして奪うのではなく与えるという生き方に転換されていくのです。ザアカイもまたイエスさまに見出され、そして他者の存在に目が開かれていきました。「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」（１９：８）と言います。新しい彼の生き方が始まりました。

聖書の神さまは、与える神さまです。「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」（ヨハネ３：１６）とあるように、奪うのではなく、与え、回復される神さまです。その神さまの子として生きる時にわたしたちもまた奪うのではなく与える者に変えられます。わたしたちは神さまからたくさんの恵みを与えられました。神さまは、大切な独り子の命まで、すべてを与え尽くしてしまわれました。パウロは言います。「主は豊かであったのに、あなたがたのために貧しくなられた。主の貧しさによって、あなたがたが豊かになるためだったのです」（Ⅱコリント８：９）そのことを考えたら、わたしたちは何をして主にお返ししようとなるのではないでしょうか。自分の命を差し出しても足りない。わたしたちはそれだけの恵みを受けているのです。だからこそこの恵みを自分の私利私欲のためではない。神さまのために、隣人のためにお返ししたいと願うのは当然でしょう。奪うのではなく、与えるためにわたしたちはキリスト者として生きています。

天の父よ。自分でも気づかないところで、だれかから奪い取って生きて来たわたしたちです。それほどに身勝手な、自分中心な者です。何よりあなたから与えられた恵みを忘れ、それを無駄に浪費するような生き方をしておりました。懺悔いたします。どうぞあなたの恵みに応え、奪うのではなく与えることができますように。主の御名によって祈ります。アーメン。